

弟の縁組と学資援助頼む

大崎市古川出身の政治学者、吉野作造（1878～1933年）が明治時代末、弟の学資について、故郷の縁者を頼ろうとしたことを示す手紙の現物が初めて公開された。縁者の子孫が所持し、吉野作造記念館（同市）などの依頼に応じた。吉野が大正デモクラシーの旗手として活躍する以前のもので、2・5頁にわたる筆書きの文字から、弟の将来を案じる切迫した息づかいが伝わる。

公開したのは仙台市青葉区、幼稚園長、渋谷和邦さん（56）。渋谷さんによると、手紙は1908（明治41）年8月に書かれ、曾祖父の渋谷栄蔵に届いたもの。当時、吉野は清国（現・中国）の有力総督だった袁世凱の息子の学問指南役として天津に滞在中で、そこから出された。

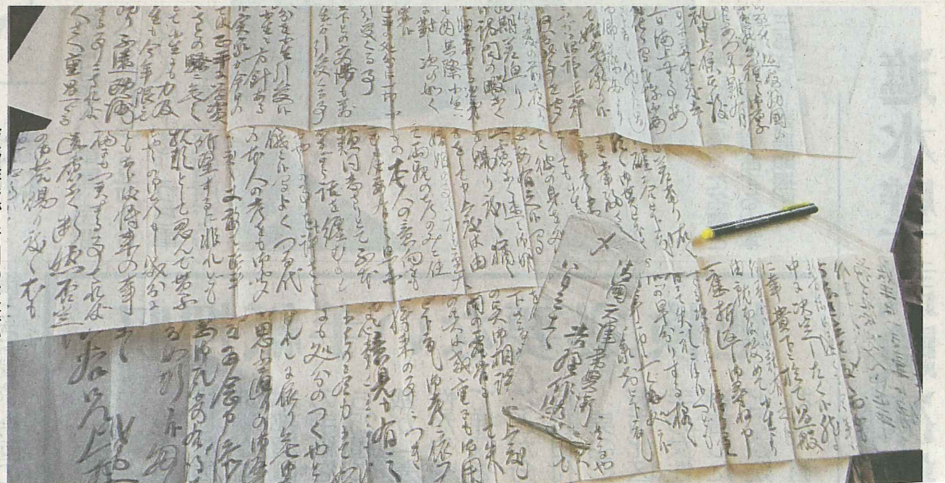
内容は旧制中学を出て進学を目指す吉野の弟正平が、栄蔵の長女で女

記念館依頼で所有者初公開

学生をつる代に恋しており、渋谷家の婿を迎え、学資も援助するようお願いするもの。同年春に古川で大火があり、糸綿商を営んでいた吉野の実家も類焼し破算の危機に陥った。吉野自身の生活も苦しく、古川の資産家で7歳年上の栄蔵を頼った。吉野家と渋谷家は幕末に縁組して以来のつきあいで、吉野は子ども時代から栄蔵と親交があった。

しかし結局、縁談はまとまらず、つる代は19歳で病没した。正平は戦後の1960年代まで存命した。吉野は手紙の中で「縁談は本人同士の意味が大事なとは言ってもない」とも書いていた。手紙の内容は活字で書籍に収められているが、筆致の分かる現物の公開は初めて。渋谷さんは「吉野研究の新たな進展を期待し公開に応じた」としている。

【小原博人】



吉野作造が清国の天津から出した手紙―富谷町で